

〈小学校 国語〉

児童が意欲的に取り組む作文指導の工夫

—五感を働かせて観察したことを文などに表す指導を通して—

糸満市立糸満南小学校教諭 比 嘉 恵 子

内容要約

児童の書く意欲を高めるために、児童の興味・関心の高い生き物の様子を題材に取り上げ、その様子を作文に書いてお家の人にお知らせするという学習を計画した。また、五感を働かせて取材する方法を知らせるために、五感遊びやスケッチ作文、はっけんカードなどを工夫し、作文学習に取り入れた。その結果、児童は意欲的に書く活動に取り組むことができた。また、五感を働かせて様子を詳しく書くことができるようになってきた。

【キーワード】 意欲・五感を働かせる・取材・書く力・作文指導

目 次

I	テーマ設定の理由	41
II	研究仮説	41
III	研究内容	42
1	第2学年でつきたい「書く力」	42
2	意欲的に取り組ませるための工夫	42
3	書く題材の開発	42
4	五感を働かせた取材の仕方の工夫	43
IV	授業実践	44
1	単元名	44
2	単元設定の理由	44
3	単元の指導目標	44
4	単元の指導計画	45
5	本時の指導計画	46
6	仮説の考察	48
V	研究の成果と今後の課題	50

児童が意欲的に取り組む作文指導の工夫

—五感を働かせて観察したことを文などに表す指導を通して—

糸満市立糸満南小学校教諭 比 嘉 恵 子

I テーマ設定の理由

国際化、情報化など、様々な面で大きく変化してきた社会情勢にあって、その変化に対応できる〔生きる力〕を育成することが今日の学校教育に求められている。平成10年7月の教育課程審議会の答申における国語科の改善の基本方針には、「自分の考えを持ち、論理的に意見を述べる能力、目的や場面などに応じて適切に表現する能力、目的に応じた的確に読み取る能力や読書に親しむ態度を育てることを重視する」ことが示されている。これを受け、新学習指導要領の国語科の目標においては、特に「国語を適切に表現する能力」の育成が最初に位置付けられ、自分の考えを自分の言葉で積極的に表現する能力や態度が重視されて、具体的な言語活動例が示されている。

これまでも表現力を育成するために実際に書く活動を多くすることが強調され、実践に努めてきた。しかし、作文の学習になると「何を書いていいかわからない」「どう書けばいいかわからない」「書くのが面倒」などと書くことに抵抗を示す児童が多く、意欲的に作文を書く児童は少ないのが現状であった。また、事象だけの羅列で終わるような作文も多く、五感を働かせて様子を生き生きと書いている児童は少なかった。そのことから自分のこれまでの指導を振り返ってみた時、書く時数は増やしたものの、作文を書き上げるまでの過程の中で、題材の見つけ方や取材の仕方などの細かな手だてが不十分なために、意欲的に書かせたり書く力を高めたりすることができなかったのではないかと反省しているところである。

児童が意欲的に作文に取り組むためには、児童が書くことに興味・関心をもつような題材を選んだり、気付いたことや感じたことを知らせたくなるような思いや願いを持たせることが大事である。そのためには、児童が喜んでかかわっている飼育活動や栽培活動など体験したことの中から題材を取り上げ、五感を働かせて、観察したり気付いたり触れあったりしたことをもとにして書かせることにより、書く意欲も高まり書く力も身に付くと考えた。

そこで、作文指導において、児童が書くことに興味関心を持つような題材を開発し、他の人に知らせたいという思いを持たせ、五感を働かせた取材の仕方などを作文学習に取り入れることによって、児童の書く意欲が高まり書く力も高められると考え、このテーマを設定した。

II 研究仮説

- 1 第2学年における作文指導において、児童が書くことに興味・関心を持つ題材を取り上げ、他の人に知らせたいという思いを持たせれば、児童の書く意欲が高められるであろう。
- 2 五感を働かせて取材する方法を知ることにより、取材の目が広げられ文章を詳しく書くことができるであろう。

Ⅲ 研究内容

1 第2学年でつきたい「書く力」

第2学年としての「書く力」は、下記の通りである。

経験したことや想像した事などについて、順序が分かるように、語や文の続き方に注意して文や文章を書くことができるようにするとともに、楽しんで表現しようとする態度を育てる。

- ア 相手や目的を考えながら、書くこと。
- イ 書こうとする題材に必要な事柄を集めること。
- ウ 自分の考えが明確になるように、簡単な組立てを考えること。
- エ 事柄の順序を考えながら、語と語や文と文との続き方に注意して書くこと。
- オ 文章を読み返す習慣を付けるとともに、間違いなどに注意すること。

2 意欲的に取り組ませるための工夫

『表現の能力と意欲を育てる作文の授業』（田近洵一編）によると、「書くことに意欲を持って取り組ませるには、表現意欲を書きたてるような仕掛けが必要だ。」として、次の3つを挙げている。

- ・書くことを必然とする場の設定
- ・書いてみたくなるような題材の開発
- ・興味・関心の持てる活動の工夫

子供たちが意欲的に作文に取り組むためには、まず書いてみたくなるような題材に出会うことが大切である。また、それを伝える（読ませたい）相手があり、自分の書いたことが喜ばれているという実感を味わうことのできる場を設定することが大切である。さらに、興味・関心の持てるような学習活動の工夫と、どの子にも書く力をつける工夫をすることが必要である。

そこで、まず子供たちが喜んで飼育活動に関わる生き物を題材として取り上げた。場の工夫としては、興味を持って飼っている生き物の様子をお家の人に知らせてあげようと呼びかけ、作文に書いて知らせることにした。活動の工夫としては、五感を働かせて生き物を観察したり、表紙に生き物の絵を入れて絵本風に作文を仕上げ、お家の人からの感想を書いてもらうようにした。

3 書く題材の開発

(1) 観察したことを文などに表すこと

新学習指導要領において、国語科の「内容の取り扱い」の中に具体的な言語活動例が示された。これは、指導内容と言語活動との密接な関連を図るためである。第1学年及び第2学年の「書くこと」の言語活動例としては、「絵に言葉を入れること、伝えたい事を簡単な手紙などに書くこと、先生や身近な人などに尋ねた事をまとめること、観察した事を文などに表すことなど」となっている。

「観察した事を文などに表すこと」は、他の領域や他の教科などに関連する活動を通して指導していくもので、例えば生活科の授業との関連が考えられる。観察する対象はできるだけ身近にあって、教師もその様子を知ることができ、継続して観察できるものが効果的である。また、低学年では、記録文という形式的なものではなく、一人一人の児童の思いや願いを大切にできるだけ自由に書かせることが大切である。

(2) 児童が書くことに興味・関心を持つ題材の開発

生活科は、子供たちの見る・調べる・作る・探す・育てる・遊ぶなどの具体的な活動を通して、自分自身と社会・自然との関わりを深めていく教科である。この生活科で学んだ体験活動の中には、子供たちの心をとらえる題材が豊富に詰まっている。その感動や発見の喜びを国語科の書く活動へと繋げていくことで、喜んで書く子が育つと考える。そこで、生活科と関連させた題材を取り入れた作文年間指導計画を作成してみた。

表1 第2学年の書く力を育てるための作文年間指導計画 【●生活科と関連させた作文単元の工夫】
【◇生活科と関連させた短作文】

月	単 元 名	生 活 科 の 年 間 指 導 計 画
4月	今週のニュース② 五感カードを使った五感遊び・スケッチ作文(◇) はるのいろはるのにおい(◇)	大はつけん はるの町 ぐんぐんそだて 雨のいろ 雨のにおい げんきにそだて
5月	ミニトマトの観察(◇)	
6月	雨のいろ雨のにおい(◇) じゅんじゅんに思い出して書こう⑥(●) 「町たんけんをしたこと」 たんけんしたところへおれいじょうを書こう(◇)	
7月	いきもののようすをおうちの人にお知らせしよう⑩(●)	
9月		
10月	みんなに教えてあげたいな⑧(●) 「おもちゃづくり」	おもちゃのゆうえんち まつりだ やっほいほい あきの町ひろがれ つたえよう ふゆのいろ ふゆのにおい わたしのものがたり
11月	1年生におまつりへのしょうたいじょうを書こう。(◇) 絵本を作ろう⑫ 「こんなお話を考えた」 あきのいろあきのにおい(◇)	
12月	ことばであそぶ④ 手紙を書こう(◇)	
1月	ふゆのいろふゆのにおい(◇)	
2月	家の人に知らせるつもりで⑩ 「できるようになったこと」	
3月		

4 五感を働かせた取材の仕方の工夫

(1) 五感を働かせるとは

五感とは「視・聴・嗅・味・触の五つの感覚。これらの感覚によって、外界の状態を認識する。」(大辞泉)とある。この研究においては、五感を働かせるとは上記の五感以外に「気持ち」も含めて、ある事象を観察する場合に、見たことや聞こえた声・音、におい、手触り、心で思ったことや感じたことなど、感覚をフルに働かせることと捉えた。

(2) 五感を働かせた取材の仕方の工夫

「書くこと」の内容に「書こうとする題材に必要な事柄を集めること」という取材に関する指導事項がある。題材は決まっても、実際に何を書いていいかわからない、どうしたら詳しく書けるのかわからない、書こうとしても経験したことを十分に思い出せないという子供たちの悩みに答えるために、詳しく思い出させる具体的な手だてを工夫しなければならない。書きたいことをより詳しく思い出すためには、五感を働かせて、その場の様子や情景を生き生きと鮮明に思い起こさせることが大切である。それを絵やメモなどに残しておくことで作文を書くときに生かすことができる。また、スケッチ作文などで対象を五感を働かせて多角的に捉えることを繰り返し経験させる。こうしたことが、日常生活の中で、何か書くことがないかと進んで取材する子供を育てることになる。そこで、次のことを計画して作文の学習に取り入れてみることにした。

① 五感カードを使った五感遊び

五感カード(資料1)を使って、五感を働かせて事象を観察し、発見したこと気づいたことをどんどん発表していく仕方を「五感遊び」と称して、国語の時間に時々、5分程度取り入れる。

② 五感を働かせたスケッチ作文(資料2)

五感遊びを生かして、五感を働かせて観察したことをノートに

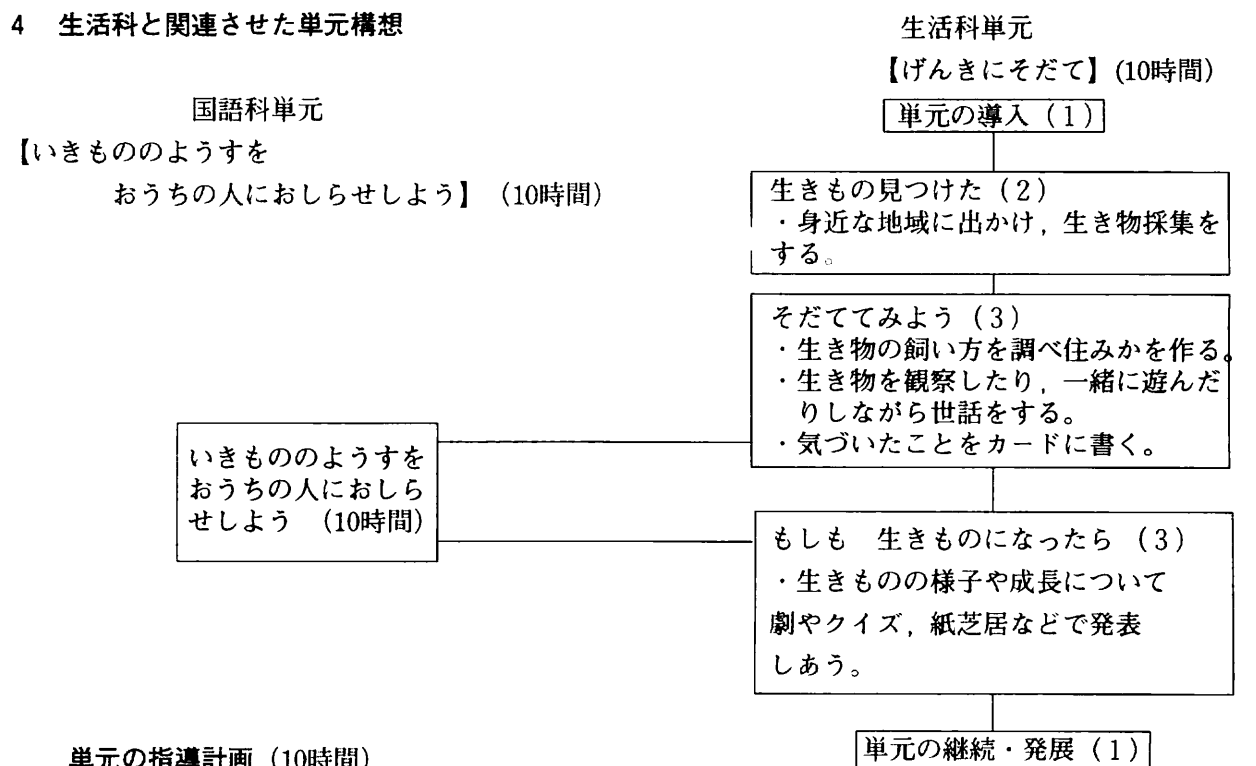


資料1 (五感カード)

(2) 観点別指導目標

- 生き物の様子を進んで取材したり，文章に書いたりすることができる。（関心・意欲・態度）
- 飼っている生き物について必要な事柄を集め，順序を工夫して文章を書くことができる。（書くこと）
- 句読点の打ち方や「 」の使い方を理解して，文章の中で適切に使うことができる。（知識・理解・技能）

4 生活科と関連させた単元構想



単元の指導計画（10時間）

	ね ら い	学 習 活 動	・教師の支援 *評価
1	・飼っている生き物の様子を知らせることを知り，書くことへの意欲を持つことができる。	・飼っている生き物のことで，不思議だな，おもしろいなど思っていることを話し合う。 ・お家の人に飼っている生き物の様子を知らせることについて話し合う。 ・教材文を読んで学習のねらいを知る。	・飼っている生き物の様子を話し合うことで，生き物への興味・関心を持たせる。 ・お家の人で，誰に生き物のことをお知らせしたいか，具体的にイメージさせる。 ・はっけんカードを作り，書く順番を考えてから書くことを知らせる。 *飼っている生き物の様子を知らせたいという思いを持つことができたか。
2	・五感を働かせた事象の観察の仕方を学ぶ。	・五感を働かせた観察の仕方をみんなで確かめ合う。 目を働かせると・・・ 耳を働かせると・・・ 鼻を働かせると・・・ 口を働かせると・・・ 手を働かせると・・・ 心を働かせると・・・	・身の回りのものを観察させながら具体的に理解させる。 *五感を働かせた観察の仕方が分かったか。
3	・教材文「かめのダイ」を読んで，五感を働かせて生き物の様子を詳しく書いていところを見つけることができる。	・教材文「かめのダイ」を読んで，五感をよく働かせて生き物の様子を詳しく書いていところを見つけ，五感マークをつける。 ・五感マークをつけたところを発表する。	・掲示用の教材文に，児童の発表を聞きながら五感マークを貼っていく。 *五感を働かせると様子を詳しく書くことができることが分かったか。

4	・五感を働かせたはっけんカードの書き方を知り、はっけんカードを書くことができる。	・教材文「かめのダイ」の文章をもとに、五感を働かせたはっけんカードの書き方を知る。 ・飼っている生き物を観察し、はっけんカードを書く。	・拡大したはっけんカードを黒板に掲示し、カードの書き方を理解させる。 ・生き物に餌をあげたり、ふれあったりさせながら観察させるようにする。 *はっけんカードを書くことができたか。
5 (本時)	・自分のはっけんカードを見直し、五感を働かせて再取材することができる。	・友達のはっけんカードと自分のはっけんカードを比べる。 ・自分のはっけんカードの五感の使い方を調べる。 ・再取材をして、はっけんカードに書き足す。	・五感を働かせて詳しく観察しているところを見つけられるようにする。 ・〈五感ゲット表〉に、自分のはっけんカードの五感の使い方を記入させ、もっと取材したいことを考えさせる。 ・取材の仕方が分からない子には、個別指導をする。 *自分のはっけんカードを見直し、再取材することができたか。
6	・はっけんカードのメモを並べ替え、書く順序を決めることができる。	・教材文「かめのダイ」の構成の仕方をみんなで確かめる。 ・自分のはっけんカードのメモを切り離して並べ替え、どんな順番にするか決める。	・教材文の組み立て方を黒板に掲示し、参考にさせる。 ・組み立てが難しい児童には、最初と最後の項目を教師が並べてあげるようにする。 *書く順序を決めることができたか。
7	・はっけんカードをもとに五感を働かせて順序よく文章を書くことができる。	・はっけんカードをもとに順序よく文章を書く。	・教材文から、文末が、～です。～ます。という表現になっていることを押さえる。 ・書き出しで困っている子には、いくつか書き出しの例を示す。 ・書き進められない子への個別指導をする。 *はっけんカードをもとに五感を働かせて順序よく文章を書くことができたか。
8	・書いた作文を読み合い、様子が詳しく書けているところを見つけることができる。	・友達の作文を読み、誤字などを修正したり、様子が詳しく書けているところを見つけて感想カードに書いたりする。 ・友達が書いた感想を読む。	・友達の作文を読んだら、感想カードに一言感想を書かせる。 *友達の作文のよく書けているところを見つけることができたか。
9	・作文を清書することができる。	・作文を丁寧に清書する。 ・表紙に生き物の絵を描いて仕上げ、お家の人に読ませて感想を書いてもらう。	・裏表紙に、お家の人からの感想を書く欄を作っておく。 *作文を丁寧に清書することができたか。
10	・お家の人からの感想を発表しあうことで、書いた満足感を味わうことができる。	・お家の人からの感想を発表したり、聞いたりする。	・なるべく多くの子に発表させるようにする。 *作文を書いた満足感を味わうことができたか。

5 本時の指導計画 (5/10時間)

(1) 本時の指導目標

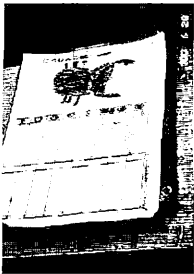
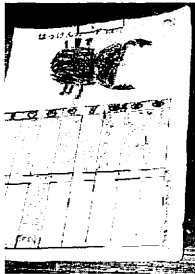
自分のはっけんカードを見直し、五感を働かせて再取材することができる。

(2) 授業の仮説

五感を働かせて取材した友達のはっけんカードを見たり自分の五感の使い方を調べたりすることを通して、新たな取材の観点に気づき、再取材をしてはっけんカードに書き足すことができるであろう。

(3) 展開の実際

㊦ (児童の発言)

過程	学 習 活 動	教 師 の 支 援	評 価
つかむ 8分	1. 前時の学習を振り返る。 2. 本時のめあてを全員で音読する。 五かんをはたらかせて、はっけんカードにつけくわえをしよう。		
深める 32分	3. 五感遊びをする。 木魚をもとに五感を働かせて気づいたことを発表する。 4. 友達のはっけんカードと自分のはっけんカードを比べて気がついたことを発表する。 T. 詳しく観察しているところは？ ㊦「大きさが6cm6mm」とちゃんと測っている。 ㊦「口がタワシみたいだった。」というところが楽しい。(蜜を飲んでいるとき) ㊦「つのがびんと立っている。」 5. 自分のはっけんカードの五感の使い方を調べ、もっと付け加えることはないか考える。 ㊦ぼくは、見たことは3こだ。 ㊦聞いたことは1しかない。 ㊦「けんかしていた。」のところにもっとつけ加えたい。 6. 再取材をして、はっけんカードに書き足す。 (再取材の前)  → (再取材の後) 	・木魚の特徴を大きさ・色・形・音などいろいろな視点から気付かせる。 ・五感を働かせて書かれた児童のはっけんカードを拡大して掲示し、よく観察しているとところやもっと詳しく観察してほしいところに気づかせる。 T. もっと詳しく観察してほしいところは？ ㊦「口が動く。」って、どんなして動いたのかな？ ㊦「つるつる」ってあるけどどこがつるつるなの？ ㊦「はりが長い。」って、どれくらい長い？ ・〈五感ゲット表〉に、自分のはっけんカードの五感の使い方を記入させる。記入が難しい子への支援をする。 ・表の五感の数や、はっけんカードのメモを見ながら、付け加えるところを考えさせる。 ・何を取材すればよいか分からない子には、観察の観点を示してあげるなどの個別指導をする。 (おたずねカードの活用) おたずねカード ・大きさ？ ・どんな色？ ・手や足は？ ・あるきかた、うごきかたは？ ・さわってみたら？ ・音やにおいは？ ・いきもの見ておもしろことは？ ・どんなせわをした？ ・えさをあげると？ ・だれかとばねをした？	*意欲的に再取材をしているか。 [関・意・態] *再取材をして、はっけんカードに書き足すことができたか。(書・こと)
まとめる 5分	7. はっけんカードに書き足したことを発表する。 8. 次時の活動を知る。	・書き足したことを発表させて、五感を使って取材できたか確かめる。	

(4) 評価項目

*意欲的に再取材をすることができたか。[関心・意欲・態度] ……………行動観察

*再取材をして、はっけんカードに書き足すことができたか。[書くこと] ……………発見カード

(5) 授業の反省

- ・友達のはっけんカードと自分のはっけんカードを対比して考えることによって、取材の目が広がり書き加えをすることができた。また、言葉の面でも、前に書いてあったはっけんカードのメモをより適切な表現に書き直している子がいた。
- ・再取材の場面では、ほとんどの子が意欲的に生き物を観察して再取材をすることができた。また、36人中32人がはっけんカードに書き足すことができていた。残りの4人は観察はしていたが書き足すことまではできなかった。
- ・支援として、取材の目を広げるための手助けとなる「おたずねカード」も準備していたが、生かさない子もいた。再取材の時間を十分確保することや観察する場の工夫、さらに再取材できない子への支援の工夫も必要である。

6 仮説の考察

(1) 児童の書く意欲を高められたか。

児童の書く意欲を高めるために、子供たちが喜んで関わる生き物を題材として取り上げ、五感を働かせて取材したことをお家の人に知らせようと呼びかけたので、児童は意欲的に取材し、「おたまじゃくしがはっぱをかじっていたよ。」などと発見したことを嬉しそうに報告していた。また、再取材の場面では、「一個ゲットしたよ。」と五感ゲット表を見ながらゲットした数を自慢げに話したり、再取材したことを教師に話してくる子も見られた。

記述の場面では、書く材料がそろっているので、どの子も集中して作文を書いていた。作文を書いた後の表紙への生き物の絵を描く活動も楽しそうにやっていた。

このようなことから、児童の書く意欲は高められたと考えられる。

(2) 取材の目が広がり、文章を詳しく書くことができたか。(学習前と学習後の作文の比較)

- ・学習前〔春の遠足の作文5/1〕〔ミニトマトの種まきの作文5/6〕
- ・学習後〔生き物の様子の作文7/1〕

	文 の 数			使った五感の種類 (目・耳・鼻・口・手触り・心)			書 く 力 の 変 容
番号	学習前 春の遠足	学習前 ミニトマトの	学習後 生き物の様子	学習前 春の遠足	学習前 ミニトマトの	学習後 生き物の様子	学習後の作文に見られる特徴 生き物の様子の作文
男1	3文	3文	11文	1種類	0種類	3種類	長い文章で、詳しく書けるようになった。
2	8	6	17	2	1	4	五感をよく働かせているが、組み立てが不十分。
3	3	3	10	1	2	3	見たことを詳しく観察して書いている。
4	/	1	11	/	0	6	五感を働かせて詳しく観察した文が見られる。
5	1	2	12	0	0	5	1～2文から、長い文章が書けるようになった。
6	3	2	8	1	1	1	1種類だけだが、見たことを詳しく書いている。
7	10	6	14	2	1	5	「」も使って観察した様子を詳しく書いている。
8	7	3	14	3	0	5	比喻表現も使って書いている。
9	10	7	10	2	2	6	事柄の順序がうまくまとまっている。
10	1	5	10	2	2	4	よく観察しているが、主述がはっきりしない。
11	4	4	15	1	2	6	よく観察した文面が見られる。

① 文の数

学習前の文の数は平均5文だったが、学習後の文の数は平均13文になっている。大多数の児童が学習前よりも文の数がかなり増えている。特に、長い文が書けなくて1～2文で終わってし

まっていた児童や書くことがやや苦手な児童の伸び率が著しい。これは、今までは何を書いていか分からなくて書けなかった児童が、五感を働かせて取材する方法を知ることによって、書くことがたくさん見つけれられたためだと考えられる。文の数が増えたことだけで書く力が高まったとはいえないが、今までよりも文章を詳しく書けるようになったと言える。

② 使った五感の種類

種 類	0～2	3	4以上
学習前	84%	13%	3%
学習後	3%	19%	78%

学習前の作文では0～2種類までの児童が84%で、見たことと聞いたことが最も多く、思ったことも「楽しかったです。」と終わるような文章が多かった。学習後の作文には78%の児童が4種類以上使って文章を書いており、見たこと以外の感覚も働かせて対象を詳しく観察しようという意識が高まってきた。また、思ったことも「かわいい。」

「こわかった。」「～してみたい。」「どうして～かな。」など、表現の仕方に工夫が見られた。

③ 書く力の変容

書く力の変容を児童の作文から比較してみる。

学習前のM君の作文（春の遠足）

4月28日、学校の遠足でふるさと公園に行きました。学校からふるさと公園まで行ってつかれました。ふるさと公園であそんで、おべんとうをたべておいしかったです。おべんとうをたべおわっておかしをたべてあそんで、12時20分ぐらいになると学校へかえって先生のおはなしをきいておうちにかえりました。

学習後のM君の作文（クワガタ）

ぼくたちのクラスは、クワガタを飼っています。大きさは、6 cm 5 mmぐらいです。はさみが2 cm 2 mmぐらいながいです。よく見たらあしにつめがついています。クワガタをさわったらつるつるしていました。小さいノコギリクワガタがはさみのまん中から、ブラシみたいなのをだしてみつをのんでいたから、友だちに、「みつのんでるよ。」
といいました。（以下省略）

M君は学習前の作文では、したことを順序よく思い出して書いているが、したことの羅列の文が多い。学習後の作文では、五感をフルに働かせ、「 」も使って観察したことや思ったことも詳しく書けるようになっている。

学習前のKさんの作文

（ミニトマトのたねまき）

きょう、わたしは、ミニトマトのたねまきをしました。そして、土をいれるときに、土のかたまりがありました。かたかったです。

学習後のKさんの作文（ザリガニ）

わたしのクラスでザリガニを飼っています。そして、しっぽは、ぐるぐるとまわっています。ザリガニのしっぽのほうは、うじむしみたいのがあります。おしりのほうがびくびくしていたからおもしろかったです。ザリガニは、はさみのほうにとげがありました。ザリガニは、さわろうとするとはさみをうえにもつてきます。はさみがうえにあがっていたからこわかったです。ザリガニの口からあわがでています。

（以下省略）

Kさんは学習前の作文では、見たことや手触りも書いている。しかし、文が短いために様子が詳しく書けていない。学習後の作文では、ザリガニの様子を詳しく観察して書けるようになっている。特に見たことを、楽しく表現して書いている。しかし、順序がまだうまく組み立てられていない。

上記の例から分かるように、多くの児童が、五感を働かせて取材できたことによって様子を詳しく書けるようになってきた。しかしながら、数多く取材できたものの、たぐさんのカードを事柄ごとに並べ替えて書く順番を決めることは、この時期ではまだ難しいようである。構成がしやすいように、事柄ごとに分けてはっけんカードを書くなどの工夫も必要である。また、教材文に

あるような、～です。～ます。という現在形の文末の書き方に慣れていない児童が多く、そのために、現在形と過去形が入り混じった書き方になっている児童が多かった。この時期の作文としては、文末を限定せずに自由な書き方をさせた方がのびのびと書けたのではないと思われる。推敲もまだ不十分で、今後「 」の使い方や改行の仕方などの指導を繰り返す必要がある。



(学習後の児童が書いた作文例)

V 研究の成果と今後の課題

1 成果

- ・生活科との関連を図り、児童の興味・関心の高い生き物の様子を題材に取り上げたことで、意欲的に書く活動へと結びつけることができた。また、生き物の様子をお家の人に知らせるという目的・相手意識がはっきりしていることで、意欲が途切れることなく持続させることができた。
- ・五感を働かせて取材する方法を知らせるために、五感遊びやスケッチ作文を取り入れたり、はっけんカードを工夫したことで、児童は五感を働かせて事象を観察することができるようになった。また、取材メモの書き方が分かり、文章を詳しく書こうとする意識が芽生えてきている。
- ・五感を働かせて取材することで、書きたいことがたくさん見つかるようになり、児童の書く力が高まってきた。

2 今後の課題

一連の学習で身に付いた取材力を、これからも継続して指導していくとともに、構成・記述の過程における指導をもっと工夫していくことで児童の書く力をさらに高めていきたい。

- ・作文の指導過程における構成・記述の過程の指導の工夫
- ・書く力を高めるための個に応じた指導の工夫改善
- ・書く力の基礎・基本を定着させるための短作文指導の年間指導計画の作成。

〈主な参考文献〉

田近洵一編	『表現の能力と意欲を育てる作文の授業』	国土社	1996年
藤原宏 監修	『思考力を高める作文指導』	教育出版	1990年
石田佐久馬編集	『作文教材でなにをどう学ばせるか』	東洋館出版社	1990年
大西道雄編著	『短作文指導法の開拓 小学校1－2年』	明治図書	1994年
文部省	『小学校学習指導要領解説 国語編』	東洋館出版社	1919年